

「八福の教え」

§ 054 マタ 5 : 3~12、ルカ 6 : 20~26

1. はじめに

(1) 文脈の重要性

- ①文脈を無視して、山上の垂訓のある言葉を取り出すことが余りにも多い。
- ②イエスは、神の国の福音をもたらされた。
- ③当時のユダヤ人たちの関心事
 - *自分の義は、神の国に入るにふさわしいものか。
- ④彼らが教えられていた唯一の義は、パリサイ人の義であった。
 - *口伝律法を行うことによる義である。
- ⑤イエスは、信仰による義を紹介された。

(2) 山上の垂訓の本質

- ①山上の垂訓は、「メシアによる律法解釈」である。
 - *パリサイ人は、律法の外面的な服従にこだわった。
 - *イエスは、内面的服従と、外面的服従の両方を強調した。
- ②山上の垂訓は、救いの道を示したものではない。
 - *もしそれが救いの道を示したものであるなら、業による救いが可能となる。
 - *聖書が教える方法は、常に、信仰と恵みによるものである。
- ③山上の垂訓は、現代のクリスチャンに適用すべきものではない。
 - *もしそうなら、私たちは、613のモーセの律法を実行せねばならなくなる。
 - *ただし、山上の垂訓から多くの教訓を学ぶことができる。
 - *新約時代の律法とは、「キリストの律法」(ガラ6:2)のことである。
 - *山上の垂訓の教えの多くが、「キリストの律法」に登場する。
 - *十戒の内九戒までが、「キリストの律法」に登場する。

(3) 八福の教えの本質

- ①信仰による義を獲得した人たちの特徴(すでに得た)。
 - *イエスをメシアと信じる信仰
- ②信仰による義を獲得した人たちが目指すべき目標(完成への途上にある)。
- ③神に全面的に信頼した結果、内面の変化を経験する。
- ④外面のみを強調するパリサイ的義とは異なる。

2. アウトライン

- (1) 神の前での謙遜
- (2) 悔い改め
- (3) 神の恵みへの信頼
- (4) 神の義への渴望
- (5) 責任転嫁からの脱却
- (6) 信仰の結果
- (7) キリストの紹介
- (8) 迫害

3. 結論：八福の教えと新約時代のクリスチャン

このメッセージは、八福の教えの本質について学ぼうとするものである。

I. 神の前での謙遜

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(3節)

- (1) 物質的貧しさとは違う。
 - ①経済的弱者、社会的弱者は、神の愛の対象である。
 - ②と同時に、裕福な者も神に愛されている。

- (2) 内面的な貧しさである。
 - ①現実的に、客観的に、自己評価ができていない人
 - ②自分の義に信頼を置いていない人
 - ③傲慢(プライド)とは正反対の性質を持った人
 - ④神にのみ信頼を置いている人

(例話) 綿畑に投資した人が財産すべてを失った。

II. 悔い改め

「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4節)

- (1) 人生で味わうさまざまな悲しみとは違う。

- (2) 罪に関する悲しみのことである。
 - ①罪に対する感受性が豊かな人

②結果として、神に対して罪を告白する人

(3) イザ61:3

「シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現す【主】の植木と呼ばれよう」

- ①シオンの悲しむ者たちとは、信仰による義人たちである。
- ②彼らは、頭に灰をかぶり、断食をし、喪に服したような状態である。
- ③神は彼らに喜びを与え、彼らを祝福される。
- ④彼らは、「義の樅の木、栄光を現す【主】の植木」と呼ばれる。

Ⅲ. 神の恵みへの信頼

「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから」(5節)

(1) モーセのような人(民12:3)

「モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」(口語訳)

(2) 主イエスのような人(マタ11:29)

「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(口語訳)

(3) 静かで、動じることのない強さを持った人

- ①神への絶対的な信頼がある。
- ②神の権威を認め、それに従っている。
- ③神の恵みによって生きている。
- ④自分を実態以上に大きく見せる必要はない。

(4) 詩37:11

「しかし柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる」(口語訳)

Ⅳ. 神の義への渴望

「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから」(6節)

(1) 飢え渴きは人間の本能である。

- ①食物

- ②愛
- ③神

(2) ここでは、靈的な意味で、飢え渴きという言葉が使用されている。

- ①完全な基準に基づいて生きたいという願い
- ②この文脈では、モーセの律法が完全な基準である。
- ③聖い生活への渴望

V. 責任転嫁からの脱却

「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから」(7節)

- (1) 自分に厳しく、他者にやさしい人
 - ①他者の必要に敏感に答える人

(例話) 罪を犯した直後のアダムとエバ

(2) 詩 18 : 25

「あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、」

(3) 箴 11 : 17

「いつくしみある者はおのれ自身に益を得、残忍な者はおのれの身をそこなう」

(口語訳)

VI. 信仰の結果

「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(8節)

- (1) これこそ、信仰による救いの結果である。
 - ①魂の奥底に真理が宿っている。
- (2) 正しい動機で行動を起こしている。
 - ①神に喜ばれる行為を行っている。
 - ②これは、パリサイ人の義と大いに異なる点である。

(3) 「神を見る」

- ①イエスが神であることを認識する。

②神を実感として感じるようになる。

(4) 詩24:3~5

「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。その人は【主】から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」

VII. キリストの紹介

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」(9節)

(1) 政治的平和とは無関係の箇所である。

(2) キリストを伝達する人

(3) 信者同志の間に平和をつくる人

VIII. 迫害

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」

(10~12節)

(1) 常に神の基準によって生きている人

①たとえ迫害が来ても、生き方を曲げない。

(2) イエスをメシアと信じたユダヤ人にとっては、迫害は現実的なことであった。

(3) 2テモ3:12

「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けま

す」

結論：

1. 八福の教えは、信仰による義を得た者の特徴を示している。

(1) と同時に、信仰者が生きるべき目標を示している。

2. 八福の教えを実行することによって、義とされるのではない。

(1) いかなる律法を行ったとしても、それによって義とされることはない。

3. では、そのようにして八福の教えを実行することができるのか。

(1) 悲劇的信仰者の姿

①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。

②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) ロマ書7章クリスチャンとロマ書8章クリスチャンの違い

①前者は、自分で自分に重荷を課している。

②その人が苦しむのは、自然の成り行きである。

③後者は、聖霊の導きで歩む。

④その結果として、祝福と平安が与えられる。

(3) ロマ8:3~4

「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです」

①キリストを信じた瞬間、私たちは罪に対して死に、解放された。

②その結果、御霊に従って歩む自由が与えられた。

③御霊に従って歩むなら、結果的に律法の要求が全うされる。

④これが聖化である。

⑤すべての鍵は、「位置的真理」を思い出すことである。

(4) 昇天のイエスは、大祭司として執りなしをしておられる。